第四講〈論説〉文芸論・詩画集論

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

詩画集というものがある。二十世紀の美術家と詩人のあいだでは、多くの詩画集が作られているし、そのあるものはすばらしいものである。日本でも最近は少なからぬ詩画集が制作されている。

九世紀後半、漢詩と絵が組み合わされて屏風(びょうぶ)芸術の第一期を作り、十世紀に入るとすぐのころからは和歌と絵の組み合わせに変わって大量に作られたようである。この絵と歌の総合体は、つまりあの当時の「詩画集」だったとはいえないだろうか。もちろん、屏風は、寝殿(しんでん)造りという仕切りの少ない家屋構造にあって、必要欠くべからざる家具であったわけだが、同時にそれが装飾品として、絵画における*唐絵から大和絵への移行、詩歌における漢詩から和歌への移行という、九世紀・十世紀の交に生じた日本芸術史上の一大転機に極めて深くかかわったとき、それはまさしく、詩画集という独立した芸術作品としての位置と意味をも持つにいたったといっていいだろう。

私がこれらの屏風の消滅を残念に思う理由のひとつは、それが美術品として見た場合にも、詩歌史上の産物として見た場合にも、「世俗性」という点において、他のどんな美術品、詩歌作品にも劣らぬ意味と価値を持っていたはずだと思うからである。私たちが今見ることのできる奈良朝、平安朝の美術の遺品は、絵画に関していえば、宗教画か、しからずんば絵巻に限られるといっていい。高僧や貴族・武家の肖像画も平安末期になれば現れるが、平安中期までのものに関しては、宗教画と絵巻物ばかりといってよい。それらは国宝とか重文の指定を受けて私たちにもよく知られている。そのため、古い時代の絵といえばこの種のものに限られていたという早とちりさえしかねないのである。

けれども、事実はそうではなかった。皇族や貴族の宮殿・邸宅では、寺院における仏画にまさるとも劣らぬ数の、風俗を主題とした絵が飾られ、鑑賞されていたのである。ここでいう風俗画とは、春夏秋冬の風物と行事を描く月次絵(つきなみえ)、家の内部でくりひろげられる男女の交渉を中心とした屋内風俗の絵、あるいはまた名所・歌枕など旅情を誘う土地の絵、唐絵の影響をたくみに消化した大和絵の日本的山水画や脱俗隠士(いんし)の閑居姿を描いた絵、また農耕漁労(ぎょろう)を中心とした庶民生活の描写その他、広範囲にわた

る主題をひとつにくくる言葉として用いたのだが、つまりは［　A　］が、屏風絵の主題であったといっていいだろう。『古今集』撰進の勅（ちょく）が下った延喜（えんぎ）五年以後のいちじるしい現象として、紀貫之をはじめとする当時の歌人たちの家集に＊屏風歌が激増するのは注目すべきことだが、それらの歌の詞書（ことばがき）ならびに画題を眺めてみるだけでも、世俗的主題の広がりについておよその概念はつかめる。そしてそれは、ある種の魅力的な空想を私たちに許すのである。

　それにしても、なぜこれらの屏風は現存しないのか。当然のことながら、それらはその用途において最も損耗しやすいものだった上、たとえば寺院の仏画が最も聖なるものとして秘蔵されたような具合には、所蔵者によって秘蔵されることがなかったから、早いうちに消滅してしまったのである。天皇、上皇などの場合は一応別だが、これらの所有者の貴族たちは、古代から中世への転換の時期に、多くは没落していった。戦火や自然の災害によって、彼らの邸宅は灰となり、あるいは朽ちはてたが、屏風はたとえば絵巻とはちがって、手軽に持ち運び安全な場所へ移すということもできなかったから、家と一緒に消滅するほかなかった。さらにまた、武家の時代になれば、世俗画の主題にも、大きな嗜好の変化が生じるのは当然で、王朝的主題は、ある種のノスタルジーを一時はかきたてたかもしれないが、まもなく中世のダイナミックで荒々しい動きをもった主題に取って替わられたにちがいない。万一、幸運にも戦火をくぐって生きのびた屏風があったとしても、それらは武家や商人の屋敷の片隅で、冷淡な好奇のまなざしに時々は見つめられながら、静かに埋もれて朽ちていっただろう。材質もまた、絹でなく紙であっただろうから、歳月をしぶとく耐えぬくのには適していなかった。紙を用いてあっても絵巻の場合なら、保存の条件に格段の相違があり、そのために私たちは今日、屏風絵よりもやや時代が下るものにはちがいないが、ともかくも「源氏物語絵巻」「信貴山縁起（しぎさんえんぎ）」「伴大納言（ばんだいなごん）絵詞（えことば）」以下の絵巻を見ることができるのだし、屏風絵全盛期よりほぼ二世紀さかのぼった時代の「絵因果経（えいんがきょう）」もその一部が現存しているのである。

　こういうわけで、私たちは紀貫之らの歌人がみずからの歌を色紙形（しきしがた）に書いて、当代一流の画工とともに共同の作品に仕立てあげた詩画集を見る機会を失ったのである。

　私はときどきこのことを考えては、惜しいと思う。以前、南蛮屏風について小文をものしたことがあるが、そのときにも、屏風というものがその用途の性質上、きわめて破損しやすいものであることを痛感した。保存状態の良好なものももちろんあったが、子供がいたずらして傷つけたと思われるような汚れも含めて、日常生活の実用品であるために避けられなかった破損を目に

するたびに、屏風というものの［B］を見る思いがした。
『伊勢集』には、伊勢がその後宮で暮らしていた宇多天皇の宮廷で、長恨歌の屏風絵が行われていたことが書かれている。また*『菅家文草』巻二の仁和元年（八八五）のくだりには、右近衛中将平正範が太政大臣藤原基経の五十の賀のため屏風絵を調進することになり、その屏風絵に題すべき詩を菅原道真に依嘱したこと、道真がこれに応じて五篇の詩を作ったことがしるされている。五篇の詩の、題だけあげれば、「郊外に馬を翫ふ」「道士が恒春の酒を勧むるを謝す」「居を卜む」「南園に小楽を試む」「園池の晩の眺め」。詩の中には、中国の神仙思想や隠士閑居の風流に憧れる気持ちが強く流れている。しかし、その絵は、はたしてどんな図柄だったのだろうか。まったくの唐絵のスタイルだっただろうか、それともすでに大和絵のスタイルが潜在的には芽生えていただろうか。
道真には、『菅家文草』巻五、寛平四年（八九二）のくだりにも、「田家閑適」および「漁父詞」という二篇の屏風絵に題した詩がある。後者はわけてても愛唱するに足る七言絶句だと思うので、引いておきたい。

抱膝舟中酔濁醪　　膝を抱き舟の中にして、濁醪に酔ふ
此時心与白雲高　　此の時、心は白き雲とともに高し
潮平月落帰何処　　潮平に月落ちて、何れの処にか帰らむ
満眼魚蝦満地蒿　　満眼の魚蝦、満地の蒿

この寛平期の詩になると、情緒はよほど日本的になっているようにも感じられる。寛平元年の頃には例の「寛平御時后宮歌合」が催され、寛平六年にはほかならぬ道真が大使に任命された遣唐使一行の唐への派遣が停止され、以後沙汰やみになるという大きな転機があった。いずれも、宇多朝において顕著になった唐からの日本の相対的独立という傾向を象徴的に示す出来事だった。道真はそういう転換期の重要な証人だったので、それゆえにたとえば右の「漁父詞」のような詩が、どんな絵と組み合わされて鑑賞されていたか、それを見ることができたらどれほど興味深いことかと思われるのである。
道真よりもほぼ三十歳ほど若かった新世代の詩人、それが紀貫之である。彼が宇多朝を代表する漢詩人なら、これは次の醍醐

朝を代表するやまとことばの詩人だった。そして、当代の代表詩人たるからには、当然、屏風歌の名手でなければならなかったし、貫之はそれのまさに花実(はなみ)兼ねそなえた第一人者にほかならなかった。

『貫之集』には八百六十四首の歌が見えるが、そのうち実に五百三十九首が屏風歌である。これほどの高い比率で屏風歌すなわち他からの注文の歌を作っていた歌人は、もちろん他にあるわけもない。

このことは、私が右に述べてきたことの筋道に沿っていえば、貫之は美術における風俗画あるいは世俗画というジャンルに［C］ということを意味するだろう。

ところで美術におけるこの領域を詩歌の領域に移してみると、どういうことがいえるのか。

圧倒的に多いのは、一月から十二月までの月次絵(つきなみえ)に合わせるための季節行事の歌であり、春夏秋冬の歌である。そしてそれに彩りを添える形で、都の内外の屋内・屋外における男女の語らいや行楽、そしてもちろん恋の歌が、少なからず作られた。

このことは、貫之の屏風歌が、いやおうなしに京都周辺の日本の風土、その季節の移りゆきを、こまかに観察しては体系化してゆく作業をともなっていたということを意味するだろう。彼は一月、二月、三月と分かたれたそれぞれの季節に、何らかの詩的注釈をほどこすという作業を行ったわけで、それは必然的に、彼の名声を慕う同時代や後代の人々に、一種の規範として受けつがれてゆくことにもなった。

つまり、この当時の風俗画あるいは世俗画の中核をなしていたのは、実は季節感のいやが上にもこまやかな強調という主題だったということである。少なくとも、現存する歌のほうから眺めるなら、このことは疑いようのない事実であった。それゆえにこそ、私は、もし絵のほうも残っていたら、突き合わせてどんなに面白い比較ができたことか、と思うのである。

『貫之集』の屏風歌はおおよそのところ制作年代順に並べられていて、洩(も)れなく彼の後半生を覆っている。したがってその歌風にも変化が見られるが、ここではふれない。歌をいちいち引いてみることも紙数の関係でできないので、目を惹(ひ)く詞書を拾ってみよう。

「延喜(えんぎ)六年、月次の屏風八帖が料の歌、四十五首、宣旨にてこれを奉る、二十首」とある屏風歌の場合――子(ね)の日遊ぶ家・二月初午に稲荷詣(いなりもう)でしたるところ・弓の結(けち)・三月田かへすところ・忘れ草・三月晦(つごもり)・五月照射(ともし)・六月鵜河(うかわ)・六月祓(はらへ)・七

月七日・織女・八月駒迎へ・小鷹狩り・衣うつ・志賀の山越え・十一月神楽・大鷹狩り・臨時の祭り・十二月仏名。

こうして眺めれば、これらが後世の「歳時記」の季題にいかにまっすぐつながってゆくか、一目瞭然であろう。

「承平五年十二月、内裏の御屏風の歌、仰せによりて奉る」の場合——

女、簾のもとにゐたるに、男ものいふ。桜の花咲けり

子の日して、車のわかるるところに馬に乗れる人、松を車に送る

女、簀の子にさし入りたる桜の花折りたる。馬に乗りて道ゆく法師、垣越しにうちよりて見る

馬に乗りたる男ども、故郷と思しきところにうちよりて桜を折る」（以下省略）

これらの詞書は、また別種の興味をひく。詞書からかなり詳しい［D］が想像されるからである。場合によっては、詞書の簡潔な叙述の方が、貫之の手慣れた歌よりもずっと面白く感じられることもある。

もうひとつ、貫之最晩年の屏風歌を引いてみる。これは歌も共に。

「同じ天慶四年正月、右大将殿［藤原実頼］の御屏風の歌、十二首」とある。

　元日、人の家に客人あまた来たり、あるは家のうちにいり、あるは庭に降り立ちて、梅の花を折る

春立たば咲かばと思ひし梅の花めづらしびにや人の折るらむ

　人の家に客人あまた来て、柳・桜のもとに群れゐて遊びするに、花散りまがふ

青柳の色はかはらで桜花散るもとにこそ雪は降りけれ

　藤の花松にかかれる

昔いかに頼めたればか藤浪の松にしもなほかかりそめけむ

　男、神の社に詣でたる

祈り来る神ぞ思へばたまほこの道の遠さも知られざりけり

男女の木のもとに群れゐたるところに、舟に乗りて渡る人あるが、指をさしてもの云へるやうなり。そのさま時鳥を聞けるに似たり。

かのかたにはや漕(こ)ぎよせよ時鳥道に鳴きつと人に語らむ

海のほとりなる人の家に、女、簾を上げて海を見出だせり。そのなかにいたく老いたる女あり。

浜辺にて年経る人は白波のともに白くぞ見えわたりける

人々秋の野に遊ぶ

秋の野と萩の錦は女郎花(をみなへし)たちまじりつつ織れるなりけり

女はなの池のほとりなる対に群れゐて水の底を見る

月影の見ゆるにつけて水底を天つ空とや思ひまどはむ（以下略）

歌には何とも出来のよくないものもある。画題の範囲が限られていたから、貫之のようにしばしば依頼を受けた場合、歌に新趣向を盛るのはこれでなかなか難しいことがあったろう。それでも、右の一連には別種の興味があって、それは、これらの歌には『土佐日記』の歌と格調の共通した歌が多いということである。『土佐日記』の執筆時期はこの屏風歌より数年前と考えられるが、貫之のこれらの歌の調べが、『土佐日記』所載の歌に通ずるものを持っているということは、何やら興味ある問題をはらんでいるようにも思われる。実際、「月影の見ゆるにつけて水底を天つ空とや思ひまどはむ」という歌のごとき、ただちに『土佐日記』中の秀作、「影見れば波の底なる久方の空漕ぎわたるわれぞわびしき」を思い出させるのである。

それにしても、こうして見てくると、貫之の歌にも、またその詞書から想像される絵の内容にも、もはや唐風のところはまったくないといっていい。道真の時代からわずか半世紀ほどの間に、とにかくまことに大きな変化が貴族階級の美意識に生じたということが、これでわかるのだ。『古今集』というものの出現の意味も、こういう背景を考えあわせることによって一層鮮烈に実感されるだろう。貫之時代の屏風絵は、まさしく、京都という盆地の、山もあれば川もある穏やかな自然、またそこにめぐり来てはめぐり去る四季のこまやかな変化に対して、ひたすら寄り添っていこうとした当時の貴族階級の、現世肯定の世界観を、

こよなくみごとに示すものであったはずである。それこそ、屛風絵の主題がすなわち風俗画であり世俗画であった理由でもある。私はそれらの消滅を惜しんだが、しかしそれらは、本質的に、時代とともに消え去るべき運命のものであったともいえる。だからこそ、それらを思い描くとき、私の中には、儚（はかな）いけれども親しみ深く、またいとおしい幻の絵図が、何枚も浮かんでは消え、消えては浮かぶのである。

（大岡信『幻の世俗画』「鑑賞日本古典文学」角川書店、1975年による）

（注）

＊唐絵から大和絵への移行――唐絵は中国風の風景、描法で描かれた絵。大和絵は日本風の風景、描法で描かれた絵のこと。前者には漢詩を添え、後者には和歌を添えるのが一般的。

＊屛風歌――屛風絵に貼り付けるために詠まれた歌。屛風は絵と歌とが一体のものとして鑑賞される。

＊『菅家文草』――菅原道真の詩文集。

問1　文章中の空欄 A に入る最適な語句を、次のア〜オから選び、記号で答えよ。

ア　貴族と庶民の生活を対比させたもの
イ　自然を多面的に描写したもの
ウ　世俗の生活一切をひっくるめたもの
エ　非現実的な空想に満ちたもの
オ　ひとつの場面として独立したもの

問2　文章中の空欄［B］に入る最適な語句を、次のア〜オから選び、記号で答えよ。
ア　価　値　　イ　宿　命　　ウ　主　題　　エ　情　緒　　オ　背　景

問3　文章中の空欄［C］に入る最適な語句を、次のア〜オから選び、記号で答えよ。
ア　飽き飽きしていたはずだ　　イ　背を向けていたはずだ
ウ　強い関心を持っていたはずだ　　エ　深く通じていたはずだ
オ　自ら手を染めていたはずだ

問4　文章中の空欄［D］に入る最適な語句を、次のア〜オから選び、記号で答えよ。
ア　歌の内容　　イ　絵の図柄　　ウ　作者の年齢　　エ　制作の事情　　オ　物語の筋

問5　傍線部「まことに大きな変化」とあるが、それは何風から何風への変化か。「［　　］風から［　　］風への変化」という形で答えよ。

問6　次のア〜オから本文の内容に合致するものを一つ選び、記号で答えよ。
ア　屏風絵と屏風歌とは、基本的に同一の人間によって制作されることが多い。
イ　屏風絵に添えられた屏風歌には、意欲の乏しい、つまらない内容のものが多い。
ウ　平安時代の絵画には、屏風絵のような世俗画・風俗画しか存在しない。
エ　大和絵の画題には季節を主題としたものが多いが、漢詩の画題には季節感が乏しい。
オ　屏風絵は絵巻のように持ち運ぶことができないため、消滅しやすい。

第四講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　大岡信＝おおおか　まこと（一九三一～二〇一七）静岡県生まれ。東京大学文学部国文学科卒。詩人としての作家活動の他、明治大学教授、東京藝術大学教授など歴任。朝日新聞朝刊の連載「折々のうた」でも知られる

●紀貫之＝きの　つらゆき　『土佐日記』の書き出し「男もすなる日記というものを女もしてみんとて」

○「歳時記」年中行事とそれにまつわる生活を記した本。俳句の季語を収録した本も歳時記という

語句

転機＝てんき→変わり目。ターニングポイント
世俗性＝せぞくせい→宗教性とは対比的な日常性
早とちり＝はやとちり→数例見ただけで間違った判断をしてしまうこと。早合点（はやがてん）。早飲み込み
風俗＝ふうぞく→日常的な暮らしぶり
歌枕＝うたまくら→和歌に詠まれた名所やそれを記した書物
旅情＝りょじょう→旅をしているんだというしみじみとした実感
隠士＝いんし→世間から離れ山などでひっそり暮らす人。隠者（いんじゃ）
閑居＝かんきょ→のんびりとした暮らしの場。または暇（ひま）であること
勅＝ちょく→天皇のことば。勅命
詞書＝ことばがき→和歌などの前書き説明

概念＝がいねん→考えや思想、およびそれを表現する抽象言葉
損耗＝そんもう→使っているうちに擦り減ったり傷んだりすること
嗜好＝しこう→趣味上の好み
ノスタルジー→失われたものを懐かしむこと。懐古趣味
好奇＝こうき→珍しいものに興味を向けること
小文をものす＝しょうぶんをものす→ちょっとした文章を書くということ。小文とは、自分の書いたものを控えめに、謙遜して表現したもの
後宮＝こうきゅう→天皇の后などが住む宮殿
長恨歌＝ちょうごんか→中国の詩人白居易（はくきょい）（七七二〜八四六）の作品。唐の玄宗（げんそう）皇帝と美女楊貴妃（ようきひ）を題材にした感傷的な詩。「ちょうこんか」とも読む
調進＝ちょうしん→注文に応じてつくり贈呈すること
依嘱（委嘱）＝いしょく→特定の仕事を外部に依頼すること
神仙思想＝しんせんしそう→山中での修行により不老不死や神通力（じんつうりき）を得た仙人がいるという考え
道士＝どうし→道教を極めた人。仙人
沙汰やみ＝さたやみ→問題や話題とされなくなること、あるいは、物事の評価や判断をしないこと
居を卜む＝きょをしむ→占いで住んでもよい土地か決めること
花実兼ね備えた＝はなみかねそなえた→名実、つまり名声と内実や才能をともに兼ね備えていること
体系化＝たいけいか→一つの方針にもとづいてまとめ上げること
格調＝かくちょう→芸術作品などがもつ味わい

復習問題　第四講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）世ゾク性を題材とした作品　① 属　② 続　③ 俗　④ 族　⑤ 賊

（イ）平安朝の屏風絵をカン賞する　① 鑑　② 干　③ 感　④ 環　⑤ 完

（ウ）山中のカン居で静かに暮らす　① 閑　② 官　③ 間　④ 監　⑤ 館

（エ）古寺の秘ゾウ品を調べる　① 臓　② 像　③ 造　④ 蔵　⑤ 贈

（オ）芸術史上の一大転キとなる　① 機　② 気　③ 期　④ 記　⑤ 貴

（カ）屏風の用トを考える　① 戸　② 途　③ 徒　④ 吐　⑤ 都

（キ）冷タンなまなざしを受ける　① 鍛　② 担　③ 胆　④ 淡　⑤ 丹

（ク）中国の神セン思想を表現する　① 線　② 仙　③ 鮮　④ 選　⑤ 戦

（ケ）研究を体ケイ化してまとめる　① 景　② 敬　③ 系　④ 形　⑤ 計

（コ）格チョウの高さを受け継ぐ　① 帖　② 調　③ 張　④ 庁　⑤ 徴

第四講　模範解答

問1　ウ

問2　イ

問3　エ

問4　イ

問5　漢詩（風から）やまとことば（風への変化）

問6　オ

復習問題　第四講　模範解答

（ア）③　（イ）①　（ウ）①　（エ）④　（オ）①
（カ）②　（キ）④　（ク）②　（ケ）③　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）世俗性　（イ）鑑賞　（ウ）閑居　（エ）秘蔵　（オ）転機
（カ）用途　（キ）冷淡　（ク）神仙　（ケ）体系化　（コ）格調